

〔学 会〕

東京女子医科大学学会 第44回総会プログラム

日 時 昭和53年9月30日(土)
会 場 東京女子医科大学本部講堂

演説規定 演説：1題7分 討論：1題2分

午 前 の 部 (A.M. 8:00~12:00)

開 会 の 辞 竹内 幹事

演 題

一 般 演 題 (8:00~12:00)

1. 活性炭吸着 Brd U によるマウス精祖細胞および腹水肝癌 MH 134の染色分体交換の研究.....
..... 神田尚俊 (東女・第二解剖)
2. 免疫走査電子顕微鏡法によるニワトリヒナ十二指腸のビタミンD依存性
カルシウム結合蛋白質の細胞内分布の観察..... 〇野田節子・久保田くら (東京・第一解剖)
3. アルコール連続投与ラットにおける血清 Lysosome 酵素の変動と
肝組織化学的所見について..... 〇中村茂基・阿部和枝・山下ケサ子・山館伸子 (東女・法医)
4. オクチル錫化合物の毒性に関する実験的研究.....
..... 〇森信 茂・海老沢 久・佐藤 稔・百溪 浩・石津澄子 (東女・第二衛生)
5. 子宮腔部試切標本にみられる癌および上皮内癌について.....
..... 〇石川千鶴・中橋光子・小宮山節子 (東女・第一病理)
6. クロロゲン酸とアミノ酸から生じる緑色素に関する研究 (VI)
一化学構造の検討一..... 〇堀川博朗・松村義寛 (東女・生化学)
7. Mycoplasma pneumoniae 溶血能変異 II
変異株の安定度と一般性状について..... 〇弥吉真澄・荒明美奈子・河野雅子・吉岡守正 (東女・微生物)
8. 顕微分光光度法による単一錐体視物質の測定..... 〇橋本葉子・阿部真知子 (東女・第一生理)
9. 水中のマウス肝炎ウィルス除去に関するシルバーカーボンの効果について.....
..... 〇矢後文子・白坂竜暁・赤上典子 (東女・寄生虫)
10. 電波探知による毒蛇ハブの行動追跡..... 和田芳武 (東女・寄生虫)
11. インスリンリセプター抗体を有し、低血糖、発汗発作を示した糖尿病の1例.....
..... 〇竹居真知子・西川 哲・大森安恵・平田幸正・柏本洋子 (東女・糖尿病センター)
12. 当科の過去5年間における重症 DIC 例の検討..... 〇村山啓三郎・河西 洋・宇都宮 道・
篠崎百合子・蓮尾清子・扇内美恵・柴田敏江 (東女・産婦人科)
13. ペーチェット病に対するコルヒチン療法..... 〇西村 素・荻原洋子 (東女・皮膚科)

14. 胃の腸上皮化生粘膜における脂肪吸収……………○堤 京子・田中三千雄・太田由紀子・白鳥敬子・渡辺伸一郎・丸山正隆・黒川きみえ・小幡 裕・竹内 正 (東女・消化器病センター内科)
金山和子・村上 平・鈴木 茂・鈴木博孝 (東女・消化器病センター外科)
15. 血液透析患者の血漿コリンエステラーゼ値について……………
……○宮島節子・川真田美和子・江上洋子・山村佳江・藤田昌雄 (東女・麻酔科)
東間 紘・太田和夫 (東女・腎センター)
16. 抜歯時の心電図所見……………○阿部広幸・扇内秀樹・河西一秀 (東女・歯科・口腔外科)
17. 内因性精神疾患における嫉妬妄想……………寺坂小夜子 (東女・神経精神科)
18. 炭酸リチウム療法と臨床脳波……………高山美登利 (東女・神経精神科)
19. Phenobarbital 単独投与の小児における血中濃度の年齢的差異……………
……○北原久枝・後藤友子・杉江陽子・福山幸夫 (東女・小児科)
20. CTscan において脳室拡大像を示した Laurence-Moon-Biedl-Bardet syndrome の1例……………
……○樋上裕子・岡山健次・竹宮敏子・丸山勝一 (東女・神経内科)
21. 動脈瘤における RI angionaphy の意義……………○榎原幸子・喜多みどり・和貝恵子・牧 正子・日下部きよ子・山崎統四郎・重田帝子 (東女・放射線科)
22. 副腎の CT スキャン……………○広沢邦浩・成松明子・松永和歌子・鈴木恵子・飯田恵子・平松慶博 (東女・放射線科)
23. HDL-コレステロールの正常値の検討および冠状動脈疾患群との対比……………
……○赤松順子・山下婦美子・松野 堅・堀江俊伸・山田辰一・渋谷 実 (東女・成人医学センター)
藤井幹夫・藤田政之 (東京クリニカルラボラトリー)
24. シェム猫から感染した Microsporidiumによる小水痘性斑状白癬の1例……………
……○塩谷千賀子・羽田野留美子・酒井弥寿子・青木良枝 (東女・第二病院皮膚科)
25. 最近経験した大腿骨大転子部結核の2例……………○松木孝行・大野博子・上田礼子・石上宮子・須永 明・菅原幸子 (東女・第二病院整形外科)
26. 家兎 VX₂ 腫瘍に対する Levamisole の能動免疫療法の効果……………
……○松村功人・山崎靖夫・蒲谷 堯・服部俊弘・芳賀駿介・遠藤久人・川田裕一・尾崎 進・芳賀陽子・梶原哲郎・坪井重雄 (東女・第二病院外科)
27. 小児頭蓋咽頭腫の1例……………○湖山信篤・高橋 明・梶原哲郎 (東女・第二病院外科)
28. シーラントによる齲蝕予防……………○花新発二美・鈴木裕子・金子 信・林 金柱 (東女・第二病院歯科)

午後 の 部 (P.M. 1:00~5:00)

29. リハビリを兼ねた老人短期入院の経験……………高僧寿代子 (久我山病院)
○板橋幸子 (調布福祉事務所)
笠井 和 (東女・小児科)
池田政隆 (至誠会第二病院)
30. いわゆる救急疾患について……………○湯浅邦彦 (東女・情報管理統計室)
小野 恵 (東女・第一衛生)
31. 形成外科における熱傷例とその治療方針……………○瀬理 純・堀 好道・佐々木健司・上村隆志・若松信吾・野崎幹弘・林 道義・平山 峻 (東女・形成外科)
32. Purcher 外傷性網膜症の1例……………大西裕子 (東女・眼科)
33. 回腸ポリープとメッケル憩室を伴った腸重積症の1治療例……………
……○村瀬 茂・武田剛一郎・藤井昭芳・村田 順・馬淵原吾・齊藤正光・倉光秀麿・織畑秀夫 (東女・外科)

第44回総会 (P.M. 1:45)

挨拶.....吉岡 博人 会長
 庶務会計報告.....佐藤 幹事

特別講演 (P.M. 2:00~2:40)

「ホルモン制御機構における生体アミンの関与」.....東京女子医大教授 野本 照子

シンポジウム (P.M. 2:45~5:00)

「救急疾患の初期治療」

- 司会.....東京女子医大教授 織畑 秀夫 (外科)
- 1) 心疾患の救急医療.....助手 高橋 早苗 (心研内科)
 - 2) 急性呼吸不全の病態と治療.....教授 金野 公郎 (呼吸器内科)
 - 3) 代謝性昏睡の初期治療.....教授 平田 幸正 (糖尿病センター)
 - 4) 緊急外科治療を必要とする胸部疾患.....教授 和田 寿郎 (第一外科・心研外科)
 - 5) 熱傷ショックの初期治療.....教授 平山 峻 (形成外科)
 - 6) 東京女子医大脳神経センター ICU における手術数の推移
 一脳神経外科救急医療の現況一.....助教授 天野 恵市 (脳神経外科)
 - 7) 小児科における救急医療の実際一特に輸液療法を中心にして一.....講師 山口規容子 (小児科)
 - 8) 腹部外傷の初期診療.....助教授 倉光 秀磨 (外科)
- 閉会の辞.....梅津 幹事

東京女子医科大学学会 第44回総会演題抄録

1. 活性炭吸着 BrdU によるマウス精祖細胞および 腹水肝癌 MH 134 の染色分体交換の研究

(第二解剖) 神田 尚俊

5-bromodeoxyuridine (BrdU) で培養細胞の DNA を continuous labeling すると染色分体がギムザ染色で分染される。2重鎖 DNA の1本のみが BrdU でラベルされた染色分体は濃染し、2本共に BrdU でラベルされた染色分体は淡染する。しかし、*in vivo* では急速に BrdU が分解されるため染色分体の分染は難しい。活性炭に吸着された BrdU を用い、この問題を検討したところ、活性炭に吸着された BrdU を腹腔に1回投与するだけで、マウスの精祖細胞および腹水肝癌 MH 134の染色分体を分染することができた。この方法で、それぞれの細胞について染色分体交換を観察した結果以下の事がわかった。(1)活性炭に吸着された BrdU は少なくとも5回の細胞分裂に必要な DNA をラベルする。したがって分染パターンから細胞が BrdU の存在下で何回分裂したかを識別できる。(2) BrdU によるラベルのピークは2回目の細胞分裂前のS期にあり(培養細胞では1回目のS期)、*in vivo* では細胞内の thymidine pool が *in vitro* の細胞より大きいことを示している。(3)投与した BrdU の量が多くなると染色分体交換の頻度も高くなり、BrdU の dose effect が働いたことを示している。(4) BrdU の dose effect がほとんどないと考えられる量の BrdU を投与した時、染色分体交換の頻度は精祖細胞において平均1.75/cell、腹水肝癌細胞において平均4.5/cell で、癌細胞の方が有意に高かった。(5)本法では骨髄・脾臓の分裂細胞の染色分体はできなかった。

2. 免疫走査電子顕微鏡法によるニワトリヒナ十二指腸のビタミン D 依存性カルシウム結合蛋白質の細胞内分布の観察

(第一解剖) ○野田 節子・久保田くら

ニワトリヒナ十二指腸粘膜に、V.D によつて誘導されるカルシウム結合蛋白質 (CaBP) が発見されて以来、カルシウム吸収過程における CaBP の役割について多くの研究がおこなわれているが、その詳細な機能については未だ解明されていない。その解明の基礎となる

べき CaBP の細胞内分布については相反する2つの観察がされている。1つは杯細胞と吸収上皮細胞の微絨毛膜に存在するという報告と、杯細胞や微絨毛膜には存在せずに吸収上皮細胞の細胞内に局在するという報告である。抗原が細胞表面に存在する場合にはその局在を証明するために免疫走査電子顕微鏡法による観察が可能である。もし CaBP が細胞表面に局在する場合には、この方法によってその局在部位を証明できるはずである。そこで演者らは抗体に polystyrene latex を結合させて marker とする免疫走査電子顕微鏡法を用いて CaBP の細胞内分布を観察してみた。CaBP に対する抗体は、ニワトリヒナ十二指腸から精製した CaBP を用いてウサギから得た。

D 欠乏並びに2000 IU の D_3 投与48時間後のニワトリヒナ十二指腸を用いて観察した結果、CaBP は D_3 投与ヒナ十二指腸の杯細胞の分泌物および自由表面をおおっている粘液に観察された。

3. アルコール連続投与ラットにおける血清 Lyso- some 酵素の変動と肝組織化学的所見について

(法医) ○中村 茂基・阿部 和枝・
山下ケサ子・山館 伸子

ラットにアルコールを連続投与したときの Lysosome 酵素の変動を血清についてしらべ、あわせて肝において組織化学的な検討を行なった。

実験方法は、アルコール濃度39%の市販2級ウイスキーを用いて、これを15%に希釈し、給水瓶に入れ、ラットはこれのみを飲用するようにして約4週間飼育した。その後ラットは採血の後失血死させ、肝を採取した。なお無処置群を対照とした。組織化学的検索は、 β -Glucuronidase (以後 β -G)、Acid Phosphatase (以後 ACP)、脂肪について行なった。固定液は10%ホルマリン・カルシウムを用い、クリオスタットにより凍結切片を作成し各染色を行なった。 β -G、ACP はアゾ色素法により、脂肪は Oil Red O 染色を行なった。なお血清 β -G は比色法、ACP は kind-king 簡易法により、測定を行なった。

ラットの平均飲酒量は 15ml/day であった。血清における β -G、ACP の活性値は対照と比較して β -G はやや増加する傾向が認められたが、ACP では差はあまり認